

黒子のタスケ

ワラスペ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

坂田銀時、高杉晋作、桂小太郎、坂本辰馬。

その四人の英雄の影に幻の5人目と呼ばれる男がいた。

完全に深夜テンションで作った一発ネタです。

広い心で見てもらおうと幸いです。

目次

黒子のタスケ

夏の陽射しが強い昼。公園では子供が遊び、蝉が鳴き、サングラスを掛けた中年がベンチで暇を持て余す。

彼の名前は長谷川泰三。昼間から公園に居る理由は無職、それにホームレスだからである。

「はあ…こんなに暑いのに、財布は寒い」

そんな彼の横にコトツとポカリが置かれた。

「うん？」

隣りを見ると刀を腰に帯刀をした青年が、いつの間にか座っていた。

「これでも飲んで元気を出してください」

「あ、ありがとうございます」

長谷川はプルタブを開き、ポカリを飲む。

「ぶはー！美味しい！」

「いつの時代もポカリは美味しいですからね」

青年もポカリを口に含む。

「…これを飲むと思いが浮かびます。皆さんとポカリを飲んだ日々を」

彼の顔から憂いが浮かび上がる。

「戦いが終わった後で飲んだ冷たいポカリ。冬の寒い日に飲んだ温かいポカリ。そして夏に飲んだ流しポカリ…」

「ちよつと待って!!?流しポカリって何!??流しそうめんみたいに竹から流すの!?!?」

「…早く皆さんに会いたいです」

「ねえ聞いている!?!?」

青年は騒ぐ長谷川を無視して遊ぶ子供達を見つめる。そんな彼を見て長谷川さんは溜め息を吐いてポカリを飲む。

「…僕こう見えて攘夷志士なんですよ?」

「そうかい。でも何で江戸に?」

「仲間に会うためです」

「さつき話したポカリを飲み合ったという?」

「はい。その中でも特別活躍したキセキの世代の四人が江戸に居ると聞いたので来てみたんですけど中々情報が無くて…」

「ぷらぷらしているプー太郎の元攘夷志士なら居るけど?」

「ちなみに僕の名前は黒子野太助です」

「君話聞かないタイプでしょ? だったら情報聞き漏らしているよ?」

「うるさい。黙って聞いてください」

「なんで他人の話聞かない癖に自分の話は聞いて欲しいの!?!?」

そんな二人に銀髪の男が近づいて来る。

「おいおい長谷川さん。ポカリ飲んでる金が有んなら俺に奢ってくれよ」

「あつ銀さん」

「お久しぶりです銀時さん」

(えっ、さつき話してたキセキの世代って銀さん!?!?)

銀時は邪魔だと言わんばかりに青年をベンチから摘み出しベンチに座りだす。

「で、長谷川さん何してんの?」

「銀さんこそ何してんの!?!?」

「何してんのって、座ってるんだけど?」

「その前!!?!?」

「その前?…:はっ!」

銀時は額に片手を置く。

「き〇たまの裏側に黒子(ほくろ)が有るって、さつき小便してる時に気づいたわ」

「惜しい!!? でも、黒子(ほくろ)じゃなくて黒子(くろこ)!!?!?」

「あつ、黒子のバスケがNEXTで連載してるんでしょ? さつき小便してる時に気づいたわ」

「どんな小便してんだよアンタ!!?!?」

そんな銀時の首筋に刃が張り付く。

「相変わらずですね…:銀時さん」

「オメエは…:黒子野」

(えっ? 何この状況?)

そして黒子野は刀をしまい銀時の隣りに座りだす。

「すみません。こうでもしないと気づいてくれませんかからね」

「オメエは影薄すぎなんだよ」

(さつき摘み出してたよね!?)

「お前のそういう所を見ていると思ひ出すよ」

* * *

確か…あの時は新たに集まった志士達の歓迎式を上げている時で、やけに気合いの入ったおっさんが新人の前で威張り倒していた。

「私は参謀補佐をしている者だ！お前達新人には早速雑用をしろ！これですべての人員揃っているか!?!」

「まだ一人…」

「誰だ！どこに居る!?!」

全員が混乱している中、お前は…

「僕はここです」

刀で参謀補佐の尻を突き刺していた。

* * *

「懐かしいですね」

「懐かしいですねじゃねーよ!!?なんで尻を刺すの!?!」

「それでもしないと気づいてくれないので」

「別の方法が有るでしょ!?!」

「当時はそれしか無かったんだよ長谷川さん」

「何その父親が」 当時はテレビが無かったんだよ って息子に言う感じ!!?」

「落ち着けて長谷川さん」

「そういえば、こんな事も有りましたね」

* * *

確か…あの時は敵の襲撃を受けて銀時さんと二人で戦っていた時。敵の弾丸が銀時さんに当たりそうになって

「銀時さん！危ない！」

とつさに僕が刀で弾丸をミスディレクション。

そして弾丸は…

「ぎやあああああ!!?」

参謀補佐の尻にダイレクトアタック。

* * * *

「そんな事もあったな」

「ダイレクトアタックじゃねーよ!!?」

「懐かしいですね」

「なんで君は悪気が無いの!」

「それより黒子野、お前どうするんだ?」

(銀さんまで無視されたし:もう何も言わないでいいや)

長谷川さんが諦めている中、黒子野は真剣な顔をする。

「僕は今の世の中でも良いと思っています。みんなが笑って過ごし、ポカリが150円で買える。きつと銀時さんの先生だって、そんな世の中を見たかったと思います。だから、また五人で:」

黒子野は立ち上がり手を差し出す。

「ラブライブに出場しましょう」

「何で!?!バスケならまだしもラブライブ!?!?」

「良いじゃねーか。A-R-I-S-Eやらサン○イズやら知らねーがぶっ倒して優勝してやろうじゃねーか」

「乗り気まんまん!?!?」

こうしてグラサンのツツコミが公園に響き渡った。